かよこの愛

廣島かよこバス活用委員会

市民の夢、現実の壁

平成19年3月新聞に「市民の夢、現実の壁」と大きく見出しを飾ったのを覚えている人は少なからずいるだろう。平成14年8月に始まり5年間に及び、広島を大いに賑わせた日本最初のバスによるまちづくり活動、廣島かよこバス活用委員会が資金難から休止状態に入ることを報じるものだった。

こうした祭型のまちづくり活動の場合、どうしても一定の資金が必要となる。従来の祭では、多くの場合、世話役が個人や企業を回り、情に訴えかけ寄付を募るのが常である。当然、世話人の負担は大きくなり、資金集めがネックで祭を続けられないというケースは多い。

当時の廣島かよこバス活用委員会は、レトロバスから引き継いだ「かよこ」というキャラクターがあった。このキャラクター「かよこ」は、お披露目パレードで大々的に紹介されただけでなく地元企業の協力もあって、一般への認知度は高かった。そこで会では、このキャラクターに活動資金を稼いでもらおうと考えた。つまり、会が広告代理店となり、祭やキャラクターを企業に積極的に売り込み広告費として活動費を捻出しようとしたのである。

かよこの会では、企業に対する広告媒体としてテレビによるイメージCM、「かよこ嫁入り祭」での花車や祭会場での看板広告に加え、会独自のフリーペーパーを発行するなどして、それらでPRを約束したのである。加えて全国規模で大きな話題となった「バスの日を譲ってください観光キャンペーン」というPR活動もするとしていた。

理念を言えば、市民が祭を盛り上げれば盛り上げるほど、かよこという祭のキャラクターが多くの人に知られる。さすれば、そのキャラクターを商品や広告に利用する企業としても広告メリットが高まるではないかという考えである。

実際、その知名度の高さは、企業にとっても大きな魅力だったのだろう。第1回のかよこの嫁入り祭を行った際に、スポンサーが短時間のうちに潤沢に集まったことが物語っている。

このことに自信を深めた同会は、第2回目も同じように企業を集めプレゼンテーションを行った。

いくつかの企業から手を上げていただいたものの、企業に対し示したメニューを全て約束どおり行うには、資金が足らなかった。

結果、この記事がでた前日に当面の活動を断念という決議がなされたのである。哀愁という二文字が会を覆ったのはこのときだった。

生涯忘れえぬ5年間

決議がなされた日、多くのメンバーは居酒屋ののれんをくぐった。愚痴に終始すると思いきや、意外にもさばさばとした空気だった。

平成14年から5年間にわたり、全速力で走り続けたような活動である。本体のバス作り、お披露目のイベントは言うまでもないが、それ以外にバスのミニチュア作りを皮切りに、子ども音楽劇、紙芝居、講談かよこ物語、アニメーション作り、企業を巻き込んでのキャラクター商品の開発、他県に出向いての観光キャンペーン等々と、息つく間がなかった。

その全てが綱渡り、まるでジェットコースターでかけ抜けた気分だ。あの頃を振り返って、廣島かよこバス活用委員会の副会長で、かよこの生みの親、山城武之氏は、

『かよことというネーミングは、当時、復元活動の関連商品を開発しようという会議の中で生まれました。

復元の会を一発で印象付けるキャラクターが欲しいという話の中で、全くの思いつきで可部の「か」に横川の「よこ」をとって「かよこ」はどうだと提案しました。すると即座に決定、あれよあれよという間に物語ができ、講談となりアニメーションとなりました。

かよこへの愛

悪ノリは止まるところを知らず、豆や酒、味噌に酢、願掛け袋等、様々なものに活用されました。やりすぎと眉をひそめる方もいらしゃったかもしれませんが、仕事としてやっているわけではないので、どこかで「ダメならやめればいいさ」という安穏とした気持ちがありました。しかし、その安穏さが幸いしたのでしょう。次々と面白いアイデアが出てきました。

平素は企業人として社会に参画していますが、普通では考えられないスピードで冗談が企画となり、そして具現化していきました。面白かったですね。このときの経験は貴重で、私の人生の中でも生涯、忘れえぬものとなりました。まちづくりは人生そのものですね。』と話す。

事務局長代行

レトロバスの復元が終わり、レトロバス復元の会から廣島かよこバス活用委員会に名前を変え、さあ新たな展開を考えようとしたときに会に参加してきた人がいる。その人こそ、現在のかよこの会の事務局長の山口孝さんである。山口さんは横川がバス復元で狂喜乱舞していたとき、横川駅前会場を横目で見ながら通り過ぎ、別の市民活動のため廿日市に向かったという。

山口さんは会とのつながりを『横川に長年お世話になっておきながら、何も還元できないことを心苦しく思っていました。そんな時、仕事の主軸を社員に譲り、自分中心の生活にシフトすることになりました。まずは町内会長を受けたわけですが、そこで「かよこの会」とのつながりが生まれ、広島市の八区覧会・八区物館のオープニング事業として行われた〝第1回かよこの嫁入り祭〟で深く関わるようになりました。以後、バスの日を譲ってください京都キャンペーンでは、請願書を読み上げる大役を仰せ使いました。会議などで黙っていられない性格が災いし「ほんなら事務局長をしんさい」とふられたわけです(笑)。

なにせ広島中の話題となった活動です。また、バス作りに参加していないものが、エラそうに、その活用方法を云々言えないと思いました。これは荷が重い「それだけは勘弁してください」と固辞したところ、事務局長代行という奇妙な肩書を頂くこととなったのです。一年間、中途半端な立場で取り組んできましたが、今年(平成20年)の初め正式に事務局長を拝命しました』と明るく話された。

新たな展開～次なる一手～

そんな山口さんにこれからの活動について聞いてみた。

『バスを作っていないことが一つの負い目となり、深く入り込めないでいましたが、逆に、私のようなものが主軸に加わるのも、一つの新陳代謝なのかなとも思います。

その成立ちから、かよこの会といえば横川商店街というイメージを持たれる人が多いようです。商店街の人が会の土台となっていることは紛れもない事実ですが、実は町内会や社協とのつながりによる人の輪が大きな力となっているのです。

会長は三篠地区社会福祉協議会の水戸川会長です。現在もふしぎ市やバス祭に参加し地道にバスの存在をアピールしていますが、それを支えるのは町内会、青少年健全育成協議会、子ども会育成協議会のメンバーであったりするのです。

一時の派手さは影を潜めているかもしれませんが、先だってのバスの日も区民文化センターの協力を得て、映画「横川サスペンス」の上映会を開き、地域の子供たちに見てもらい大きな反響を得ました。また高速4号線が開通したことで、横川がサンフレッチェのホームグランドであるビッグアーチへのバスの出発点となったことから、サンフレッチェとのつながりも生まれました。会は今もすこぶる元気で、常に次の一手を考えています。』と話す言葉は力強い。

若者の力を地域に

また山口さんはレトロバス復元から廣島かよこバス活用委員会に至るまでの一連の活動を振り返って次のように話す。

『まちづくりという観点から見たとき大きいと思うのは、横川という街のイメージアップではないでしょうか。』

と話す。

具体的な例として山口さんは、『事あるごとに「横川は元気じゃねえ」と言われます。イメージが先行しすぎているといわれることもありますが、バス復元という中で、映画、芝居と多くの若者やアーティストに参画してもらい色々なことに取り組んできました。

このことがいつしか何かやる街、面白いことをする街、元気な街というイメージを定着させたのだと思います。

イメージはとても重要です。実際、若者向けマンションが増えたり、若者向けの飲食店も増えたと聞いています。

そして何より街に演劇用のミニシアター「山小屋」ができたことが、象徴的出来事といえるのではないでしょうか。

現在、そこを拠点にブンメシという劇団が頑張っています。こうした若者の力をうまく地域に生かし、まちづくりに取り組んでいきたいと思っています。』

と話を締めくくった。

▼廣島かよこバス活用委員会

広島市西区横川町3丁目1−18
TEL082-232-2434　FAX082-232-2436
ホームページ　http://page.freett.com/retrobus/
E-mail　kayokobusyama@yahoo.co.jp

Kayoko-Bus

ロマンティストの星

フラワーフェスティバル
Zoom-Zoom